

一般社団法人街路樹診断協会主催、街路樹診断協会研修会 国際シンポジウムの開催報告と街路樹診断 GIS 利用の新たな展開に向けて 「都市樹木の診断と GIS(地理情報システム)を使った街路樹 MAP 作成」を開催

2019年6月21日、街路樹診断協会研修会、国際シンポジウムの開催報告と街路樹診断 GIS 利用の新たな展開に向けて「都市樹木の診断と GIS(地理情報システム)を使った街路樹 MAP 作成」を清澄庭園大正記念館(東京都江東区)で開催しました。

はじめに、山下副会長より開会の挨拶と、5月20日、22日、24日に行なった国際シンポジウムについて各講演の概要、シンポジウム運営に関する反省点が述べられました。

次に、永石技術委員長より、街路樹診断技術の経年進化について、診断を始めた当初から今日に至るまでの診断方法・診断マニュアルや診断機器の変遷をスライドで説明されました。1本1本の樹木の診断・評価をしっかりと行うとともに、今後は、木を見て森を見ずにならないよう俯瞰的な視点を持ちたい、という協会の姿勢も語られました。

そして、今回の研修会のメインとして、島田智里氏(ニューヨーク市公園管理局、計画 GIS スペシャリスト)による、ニューヨーク市で取り組んでいる街路樹マップについての講演が行われました。

ニューヨーク市で当時のブルームバーグ市長により2007年にスタートした長期環境政策(PlaNYC)をきっかけに、環境活動の一環として推進され、ボランティア調査員を中心に実施した街路樹調査のデータベース化について、お話しいただきました。今日までの街路樹調査の変遷と、システムの活用方法、蓄積された66万6千本の街路樹個々についての効果を環境利益として貨幣換算し、緑化による恩恵の目安にすることなど、詳細で具体的な内容でした。

街路樹マップを作り上げるために、TreeCount! 2015 というクラウドソーシングによるデータ収集のための Web システムを導入したことによる、多くの利点もご紹介いただきました。

主な利点として、

- 2千人以上のボランティアや支援団体が各自のスマートフォンなどのモバイル機器を利用して樹木調査に参加することができるようになった。
- 従来のように住所をデータベースのキーにするのではなく、高精度な GIS を用いた地理的情報をキーとすることで、樹木の情報以外にも蓄積されるデータを一元管理することが可能となった。
- 収集されたデータをすべて街路樹マップや i-Tree にリンクさせて可視化し、公開することで、ボランティアに参加する市民のモチベーションを保つことができた。

などが挙げられ、今後の日本の街路樹管理、樹木台帳のデータベース化に向けて、参考になる好事例でした。

講演後のトークセッションは、講師のほか、協会から2人のパネリストが登壇し、島田智里氏を講師として招聘した経緯の説明から始まり、参加者からの質問を募りました。

質問は、ニューヨーク市では多くのボランティアがなぜ参加するのかや、街路樹の効果を貨幣換算することへの関心、スマートフォンなどから取得する GIS データで生じる誤差の修正方法など、現実に即した内容で、データベース化に対する参加者の意識の高さが感じられました。

また、今回の講演により、技術的には日本でも導入が可能であることがわかりましたが、これらを実現させていくためには行政との連携が必須であり、街路樹診断協会として、今後、行政に対してどのように働きかけていくか、どのように市民や支援団体を巻き込んでいくかなど、課題が見えてきた話し合いになりました。

【 参考ホームページ 】

ニューヨーク市街路樹マップ

<https://tree-map.nycgovparks.org/>

ニューヨーク市 TreeCount! 2015

<https://www.nycgovparks.org/trees/treescount>

ニューヨーク市 TreeCount! 2015 によって収集されたオープンデータ

<https://data.cityofnewyork.us/Environment/treecount2015/vqzy-ders>

i-Tree(樹木測定データによる解析)

<https://www.itreetools.org/>

iNaturalist(病害虫に関するデータ収集)

<https://www.inaturalist.org/>

